

氏 名	田中 寛子	
学 位 の 種 類	博士（文学）	
学 位 記 番 号	第 6 1 1 2 号	
授 与 報 告 番 号	(甲)第 3 4 3 2 号	
学位授与年月日	平成 27 年 3 月 24 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項	
学 位 論 文 名	今 様 の 雅 俗 と 信 仰 ― 古 典 の 終 焉 と 中 世 の 萌 芽 ―	
論 文 審 査 委 員	主 査 教授 村田 正博	副 査 教授 小林 直樹
	副 査 教授 松浦 恆雄	

論 文 内 容 の 要 旨

〔序章〕本論文は、平安中期から末期にかけて流行した今様とは、どのように定義できるのか、考察を試みるものである。その際、『梁塵秘抄』所収の今様の表現について、主に語句の注釈という方法によって、その特性を解明する。また、可能な限り、歌が歌われた場を追究し、歌謡史における今様の位置付けを試みる。

本論文は二部から構成される。

第一部「今様の雅と俗」においては、「雑」と名付けられた歌群、あるいは標題すら持たない今様にこそ、『梁塵秘抄』の本質的なものが見いだせると期待されることから、「雑」部に相当する歌群から五首の今様を取り上げる。これらは、主題や語句、形式なども種々様々であり、いずれも当時の人々の好みを反映している主題を持つものである。

これらの今様の表現の位相をさぐるために本論文が用いる方法は、主に典拠の指摘と、文藝としてすでに確立している語句との比較である。伝統的な文藝との距離をはかることで、雅と俗、それぞれの要素がどのような割合で、どのように絡み合っているのかの今様が成立しているのかが明らかにできると思われる。

第二部「今様の神と仏」では、神分の歌に着目し、当時の人々の信仰と、それに伴って成立した今様の表現の特色をさぐる。神分の歌は、一読しただけではどこに面白さがあるのかさえわからないものが多い。しかし、そのような表現にこそ、今様にしか見いだせない表現の特色がある。

第二部では、以下の特徴を持つと思われる四首の今様を取り上げる。1、参詣が主題、2、寺社名、地名を列挙、3、寺社名、神仏名が歌われない、4、二首以上で一組と思われる歌群を形成、5、語句の意味、繋がりなどが不明。

第一部 今様の雅と俗

〔第一章〕「鏡曇りては―『梁塵秘抄』巻二、四句神歌、雑、四〇九歌の位置―」は、愛欲を主題とする今様の表現が漢詩の伝統の上に成立していることを論じている。

〔第二章〕「唐への憧憬―『梁塵秘抄』巻二、四句神歌、雑、四〇七歌の位置―」は、煌びやかで幻想的な異国の朝廷への憧れをうたう今様の成立過程を考察する。

〔第三章〕「虱と千手観音―『梁塵秘抄』巻二、四句神歌、雑、三四六歌、四一〇歌の関連をめぐって―」は、虱をうたう四一〇歌の俳諧性を、三四六歌との関連において再考する。

〔第四章〕「香山の花たちばな―今様と呪歌、『梁塵秘抄』巻二、二句神歌、四五三歌をめぐって―」は、古代説話を基盤に成立している今様の表現を考察することで、二句神歌の性質の一端を明らかにする。

〔第五章〕「新年春来れば―門松の今様、『梁塵秘抄』巻一、一二歌の位相―」は、門松をうたう今様の表現の位相と、歌集や伝承歌謡から歌われた場を考察するものである。

第二部 今様の神と仏

〔第一章〕「花の都を振り捨てて―熊野参詣五首における二六〇歌の位置―」は、これまで配列の上から理解されてきた熊野参詣歌を表現の面から考察し、表現の位相と歌われた場を論じたものである。

〔第二章〕「いつれか貴船へ参る道―『梁塵秘抄』二五三歌の位置―」は、この今様の当代性と詠み込まれた地名に霊地としての意味があることを明かにする。

〔第三章〕「近江の湖に立つ波は一『梁塵秘抄』二五四歌の表現一」は、二五三歌との関連も含め、二五四歌の修辞の仕組を明らかにし、表現の位置づけを試みるものである。

〔第四章〕「中世への布石—清水の冷たき二の宮に、『梁塵秘抄』二六八歌の世界—」は、日吉社の二宮がうたわれる理由と、難解語を明らかにし、当該今様の信仰世界を探る。

〔終章〕本研究は、机上の文芸とは異なる歌謡の詞章を読み解く方法として、従来の古典注釈の手法が有効であることを示すものである。今様の詞章は、語句の制約が少なく、語句と語句を結ぶ緊密さにも乏しいという特徴があるため、読み解かなければならない行間の幅が広い。従って、詞章の発想の基となる文芸に見られる普遍的な発想がどの程度浸透していたのか、文献や伝承歌謡などの流布状況を示すことによって、詞章が生み出された過程と場を想定することにつとめた。

本論文で見たとおり、今様の表現には、和歌や漢詩など雅の文芸の影響を強く受けたものが多く見いだせる。また、今様は古代的なものと中世的なものが共存している歌謡でもある。

本論文で示した方法は、音楽的、歴史的資料に乏しい他の歌謡研究においても有効なものであると考えられる。同様の手法に依って他のジャンルの歌謡研究を進め、今様と比較することで、今様の表現に見いだせる雅と俗の融合のあり方と、その完成度の高さが伺われるのではないかと推測している。

論文審査の結果の要旨

この論文は、11世紀後半、平安時代の末期に流行をみた今様^{いまやう}と呼ばれる歌謡を対象に、主として注釈という方法によって、表現の来歴や、うたわれた場を解明することに努め、その文学史上の位置づけを試みようとするものである。

この論文が、梁塵秘抄に伝えられる今様の注釈作業を進めるにあたって、最も重視するのは、それぞれの歌謡の詞句のよってくる来歴、どんな生い立ちの言葉によって成り立っているのかという点である。第一部「今様の雅と俗」は、わが国古来の和歌や中国の詩文を受容する、その状況をめぐって、伝統への依存（「雅」）と新奇の趣向（「俗」）という観点から今様の位置を見定めようとする考察。第二部「今様の神と仏」は、今様が神や仏をうたう、その表現や発想における伝統の踏襲（「雅」）と新しい局面（「俗」）とを析出することを通して、今様が中世への志向をもつものであったとする考察である。

第一部「今様の雅と俗」は、『梁塵秘抄』巻二、四句神歌のうち「雑」に収められた歌謡をめぐって、伝統の和歌とはいくぶん異質な漢語・漢詩文を積極的に素材として取り入れた面があることを論証している。歌謡番号409における「鏡暗」^{カガミクモル}（化粧をしなくなったさま）・「顚顚」^{ヤツル}などの用語、407における『開元天寶遺事』・『杜陽雜編』・『太平廣記』の受容など。さらに、当時の習俗を詠みこんだり、仏典に基づく表現が見えることを指摘している。410における「蚤」、12における「門松」、453における『佛説觀佛三昧海經』などがそれであり、こうした側面が後世の俳諧文芸へとつながるという指摘も貴重である。

第二部「今様の神と仏」は、『梁塵秘抄』巻二、四句神歌、神分の部類に収められる神仏賛嘆の今様をめぐって、その表現の特色をさぐろうとする試みである。260における熊野権現参詣、251における貴船明神参詣、254（および253）における天台比叡山参詣、268における日吉社参籠などについて、「俗」への明確な志向があることを論じている。これらの考察は、『梁塵秘抄』に伝わる今様に、中世へのいっそうの傾斜を読み取ろうとするもので、今後、さらに周辺の資料の徹底的な解説を通して、豊かな発展を期待することができる。

終章は、以上の考察のまとめである。

この論文は、平安時代末期に編纂された今様集成『梁塵秘抄』を対象として、注釈作業に取り組み、その詞句・表現の意味するところを明らかにするとともに、それらの来歴と位相について思索をめぐらせ、いかなる人びとにより、いかなる状況の中で生み成された詞章であるのかを論じた力作である。「雅」と「俗」という指標によって文藝の位置を解明しようとする方法によって、今様の位置が相応に明らかにされたと言えることができる。

今後のこととして望まれるのは、先だつ古代歌謡における表現の様相、あるいは平安時代の催馬楽・風俗歌など、今様より後の閑吟集や松の葉などの歌謡の様相、さらには俳諧などにおける「俗」の展開、等等、注釈作業を継続・蓄積することであり、そうした作業を通して、考察の射程はいっそう確かなものに昇華されるはずである。その基礎をなす業績として、この論文の意義は、大きい。

以上の所見により、この論文は、大阪市立大学 博士(文学)の称号を授与するに値する、極めてすぐれた研究成果であると認定される。